海外研修日程　ー サモア ー

日時	プログラム	滞在先
7/26（木）	関西空港発	
7/27（金）	オークランド着	オークランド
	オークランド発	
7/28（土）	アピア着	Amaile村
	サモア文化体験	
	ホームステイ	
7/29（日）	終日ホームステイファミリーと行動	Amaile村
7/30（月）	サモア文化体験	アピア
	市内視察(教材収集)	
7/31（火）	JICAサモア事務所訪問	アピア
	JICA事業視察 ・気象観測・災害対策施設（無償資金協力） ・ディーゼル発電所（有償資金協力） ・タファイガタごみ処理場（技術協力）	
	振り返り	
8/1（水）	学校訪問　視察・授業 A班　ファレアタ中高等学校 B班　モアタア小学校	アピア
	市内視察(教材収集)	
	フィアフィアショー鑑賞	
	振り返り	
8/2（木）	学校訪問　視察・授業 A班　レウルモエガ小学校 B班　アアナNo.1中高等学校	アピア
	JICA事務所員、JICAボランティアとの懇親会	
8/3（金）	学校訪問 フィアマラマラマ（特別支援）学校	機中泊
	教材収集	
	JICAサモア事務所報告会	
	アピア発	
8/4（土）	オークランド着	
	オークランド発	
	関西空港着	

訪問先所感　ー サモア ー

7/28（土）

サモア文化体験

　アヴァの儀式を体験しました。必死で儀式のしきたりにある言葉をバスの中でつぶやきながら覚えたのが印象的です。現地に着くと、みんなでラバラバを装着し、一気に異文化の世界へ入り込んだ気分でした。年配で貫禄ある方々と、若い人々との役割がはっきりしており、興味深かったです。言葉を唱え、アヴァを飲むときには緊張しました。（東出）

ホームステイ

　日本との生活の違いが多すぎて、2 泊 3 日は驚きの連続でした。自給自足の生活、必要なもの以外は買わない。物にあふれている日本での生活を見直さなければならないと実感しました。大自然の中で様々な恵みを受け、日々に感謝しながら生きている人たちが、まぶしく思えました。（石上）

7/29（日）

ホームステイ

　日曜は、教会に行きました。厳格な信仰心がうかがえました。キリスト教は、サモアの人たちにとって、生活、人生そのものだと感じました。ウム料理作りで豚を目の前でしめて、調理してくれた時は驚きのあまり、口をあけて身動きができませんでした。いのちをいただきました。（吉水）

7/30（月）

サモア文化体験

　村から車で約 10 分の所にある島を訪れた。海は言葉では表せないほど青く美しく透き通っていて、豊かな自然を体験できた。サモア南東部のこの地域が 2009 年に大津波を受けたことを知り驚いた。建て替えられた家々や今はきれいになった道路を見ると、わずか３年足らずの間に人々が懸命に復興させた様子がひしひしと伝わってきた。（横矢）

7/31（火）

JICA サモア事務所訪問

職員数や建物からこじんまりとした印象を受けたが、この中で複数の有償・無償の大きなプロジェクトが動いていることを説明していただき、日本とサモアとのつながりが見えたような気がした。
教育の分野では、理数科教育の遅れが目立ち、理数科教員養成が喫緊の課題であり、JICA ボランティアが重要な役割を果たしていることがわかった。（岩見）

気象観測・災害対策施設視察

島国でかつ国土も小さいサモアは、自然災害に対してとても脆弱なのだということがよく分かった。近代的な設備の数々はここがサモアであることを忘れそうなくらい意外なものだった。24 時間リアルタイムで気象を観測し、被害を軽減するための災害対策が行われていることが分かった。（横矢）

ディーゼル発電所

大きな機械とたくさんのサモア人に囲まれてお仕事をされている、三菱重工の中山さんのお話を聞きました。日本人 1 人で、現地の人をまとめ上げる中山さんの姿はとってもかっこよかったです。実は英語が苦手で、海外で仕事をすることになるとは思わなかったというエピソードには驚きました。（東出）

タファイガタゴミ処理場

ゴミ処理場は匂いが少なく、以前のゴミ捨て場の様子からは想像できないほど整えられていた。「福岡方式」と呼ばれるこの埋立構造のお陰でゴミ処理場だけでなく周囲の環境も改善され、市民の暮らしにもいい影響を与えていることを知り、技術協力のすばらしさを感じた。（宮澤）

8/1（水）

学校訪問　ファレアタ中高等学校

ファレアタ中高等学校では、FTT(food and textile technology、家庭科のような科目) で食育が盛んに行われていることに驚いた。FTT の先生がとても熱心だった。
生徒の軽食の様子を見るとパンのみなどが多く、青年海外協力隊が、食育が子どもたちの身についているかは疑問があるとおっしゃっていたことに納得した。（松本）

学校訪問　モアタア小学校

モアタア小学校へ。午前中様々なクラスの授業見学をし、午後は授業実践を行った。サモアの子どもたちの熱烈な歓迎に感動した。日本文化を教えているクラスもあり、多くの生徒が日本のことについて質問してきた。重要なことをみんなで復唱して覚えていく授業スタイル、授業の中で教科に関係なく歌が入るなど、日本とは少し異なった授業スタイルで大変興味深かった。どの教室もきれいに掲示物で飾られていたことも印象的だった。（酒井）

8/2（木）

学校訪問　レウルモエガ小学校

レウルモエガ小学校では、全校集会で歌を披露してくれるなどとても歓迎をして頂いてうれしかったです。前日のファレアタ中高等学校に比べ、英語は伝わりにくかったのですが、一生懸命聞いてくれたのが印象的でした。最初は人見知りをしていた子どもたちも、慣れるととても人懐っこくなり、素敵な笑顔を見せてくれました。（東出）

学校訪問　アアナ No.1 中高等学校

アアナ No.1 中高等学校を訪問。校舎が建替え中で、5 つの一般家屋を教室に改造した仮設校舎を使用していた。学校のために家を提供した村人の心意気にも感動。壁のないファレで、小さな村の子どもや家畜がうろうろする中での授業は興味深かった。

授業をするにあたり、前日の都市部の小学校と比べて中学校高学年でも英語ができない生徒が多数いることにとまどいを感じたが、先生に現地語で通訳していただき、ティーム・ティーチングのようなことも経験させていただいたのでよかった。（岩見）

JICA 関係者懇親会

JICA の方、青年海外協力隊の方とゆっくりお話ができ、サモアのことについて、自分の経験だけではない、幅広い視点を持つことができるようになった。サモアの算数・数学教育については、多くの方が課題点をあげておられ、数学の教師として日本の教育レベルの高さを感じた反面、世界の算数・数学教育の水準をより高いものにするという視点で、自分にも日本にもまだまだ貢献できることはあると感じた。（酒井）

8/3（金）

学校訪問　フィアマラマラマ(特別支援)学校

スクールバスがあり、政府からの援助もあり、日本の特別支援学校とよく似ていると感じた。しかし校長先生によると、そうなったのは最近のことで、今でも村では障害者への差別は根強く残っているとのことであった。「DV 防止」のポスターが掲示されていたり、校長先生のお話の中に「子どもの学ぶ権利、子どもの人権」などという言葉も出てきて、こうした考え方もサモアに入ってきているのだとはじめて知った。（酒井）

海外研修（サモア）に同行して

独立行政法人国際協力機構
関西国際センター（JICA 関西）
国際協力推進員　和歌山県担当　野村　実里

大洋州に浮かぶ島国サモア独立国。イメージ通りの真っ青な海が広がっていました。そこに住むサモアの人々は、おおらかでひとなつっこく、いつも笑顔で私達を迎えてくれました。

サモア到着後、まず始めのプログラムは村へのホームステイでした。着いたばかりの右も左もわからない状態で、現地コミュニティに溶け込まなければなりません。正直私はとても心配でしたが、どの先生も見事にサモア人家族と打ち解けあい、たくさんおしゃべりをし、一緒にご飯を作ったり、水浴びをしたり、サモア語を勉強したり、中には水汲みの手伝いや家庭教師まで務めた先生もいました。この経験から、異なる文化を理解・尊重すること、お互いを認め合うことの大切さについてさらに理解を深められたと思います。

現地の学校では実際に授業もしました。サモア人の笑顔に癒され、穏やかな雰囲気の中で過ごしていた先生たちも、いざ授業となるとプロの顔になります。目の前の生徒がいつもと違うサモア人であっても、先生としての真剣な眼差しは日本と変わりありません。英語での授業というハンディがある中、どうしたら自分の言いたい事が伝わるか、生徒のためになる授業ができるのかと出発前から何度も皆で話し合い、帰国後の日本での実践授業を見据えて内容を組み立てていきました。

また、国が置かれている現状や多くの課題にも向き合いました。サモアでは教育格差やゴミ問題、出稼ぎ問題や津波被害等様々な問題が複雑に絡み合っています。国際協力の現場を訪問し、サモアが持つ課題を一緒に解決しようと奮闘する青年海外協力隊や JICA 専門家の姿から、日本の開発途上国への支援のあり方、その意義を再認識できたようでした。

サモア滞在中、「日本の子供たちに自分が見て体験した事を伝えたい」「生徒が興味を持ちやすい切り口を探したい」と児童生徒の事を常に想って活動していた先生たち。日本での実践授業ではその経験を活かして参加型学習を展開しています。サモアのゴミ処理方法をテーマに掲げた先生は、ゴミ分解ゲーム等の工夫をこらした授業内容で児童たちにわかりやすく、サモアの環境問題と日本の援助を伝えました。生徒たちの目には、ただのサモアではなく、「先生が実際に行ってきたサモア」として、より身近に映っていたと確信しています。先生方が感じたありのままの事を、帰国後の授業で、子供が理解しやすいように噛み砕き、伝える。これは先生だからこそできる事なのです。

遠い世界のどこかの人々ではなく、同じ地球に住む友達のために、先生とともに児童生徒たちが今できる事を一生懸命考えて行動に移す。そんな素敵な流れが生まれつつあります。

今回の研修を通して、子供たちの心に、国際協力という芽が出ました。今後、先生たちのさらなる活躍が水となり、子供たちの成長が肥料となり、近い将来地球色の大きな花を咲かせてくれますように。